

リアクタンس特性尺度の検討

高本雪子・吉見恒平・深田博己

Examination of scales measuring reactance traits

Yukiko Takamoto, Kohei Yoshimi, and Hiromi Fukada

The purpose of this study was to find the most valid and reliable scale measuring reactance traits. This study dealt with the threat of anti-attitudinal persuasion. Subjects were 150 university students who were eligible for this experiment, and they were randomly assigned to high and low threat conditions. The procedures of the experiment were as follows: (1) pre-measurement of dependent variables, (2) measurement of reactance traits, (3) manipulation of the threat variable and presentation of a persuasive message, (4) post-measurement of dependent variables. To measure reactance traits, three kinds of reactance scales were used: Hong's Psychological Reactance Scale (Hong's Scale: 14 items), Merz's Questionnaire for the Measurement of Psychological Reactance (Merz's Scale: 18 items), and Merz's Scale revised by Imajo (Merz-Imajo's Scale: 28 items). The General Psychological Reactance Scale (General Scale: 42 items), which consisted of all items contained in the three scales, was also examined. Results showed that reactance traits measured by the General Scale had the most main effects and interaction effects with the threat variable of the four scales. Thus, it was concluded that the General Scale had the greatest validity and reliability of the four scales. The General Scale consisted of four-factors with 23 items (4 items from the Hong's Scale, 10 items from the Merz's Scale, and 9 items from the Merz-Imajo's Scale).

Key words : psychological reactance, reactance traits, Psychological Reactance Scale

キーワード : 心理的リアクタンズ, リアクタンズ特性, 心理的リアクタンズ尺度

問 題

1 心理的リアクタンズ理論

心理的リアクタンズ理論 (Brehm, 1966; Brehm & Brehm, 1981) によると, 人は, 自分が確信している自由を制限されたり脅かされたりすると, リアクタンズが喚起され, その自由を回復・維持するよう動機づけられる。リアクタンズとは, 「失われた自由を回復しようとする, または失われそう

な自由を確保しようとする動機付け状態である」と定義される(今城, 1999)。

そして自由に関する変数は「自由の確信度」と「自由の重要性」があり、自分はその自由を有しているという確信度が強いほど、またその自由が自分にとって重要であるほど、喚起されるリアクタンスは強くなる。逆に「自由の確信度」と「自由の重要性」が低いとリアクタンスは喚起されないため、この2つの変数がある程度高いことがリアクタンス喚起の前提条件だと言われる(深田, 1996)。また、今城(1994)は、リアクタンス喚起の前提条件として、この2変数の他に、問題をどう考えるかは自分で決定したいという「自己決定欲求」を測定している。これらの前提条件が満たされている時に、自由が脅威にさらされるとリアクタンスが喚起されるが、この自由への脅威が大きいほどリアクタンス反応はより強くなる(今城, 2001)。リアクタンス反応としては、「自由の行使」や「自由侵害者への攻撃」などの直接的な自由回復行動だけでなく、「自由への魅力の増大」、「送り手への好意度の減少」、「自己支配感情の増大」などの主観的な反応も生じるとされている。Brehm & Brehm (1981)は自由の直接的回復が生じにくい場合には、自由の行使や攻撃などの外示的・行動的な指標ではなく、上述のような主観的な反応の方がリアクタンス動機付けの指標としてより適切であるとしている。

2 リアクタンス特性尺度

リアクタンスの生じやすさには個人差が存在し、このリアクタンスの個人差を測定する尺度もいくつか作成されている。Merz (1983)は個人のリアクタンス傾向を測定するための Merz's Questionnaire for the Measurement of Psychological Reactance (以下「Merz 尺度」)を開発した。この尺度はドイツ語で作成され、抵抗、否定、ブーメラン効果、他人の期待することと反対のことをする傾向、といったことに関連する項目からなる。また今城(1993)は、Merz 尺度に独自に10項目加えたもの(以下「今城修正版 Merz 尺度」)を作成し、リアクタンス理論に準拠する「自由の強度と重要性」、「脅威認知」、「リアクタンスの主観的な反応の強さ」、「自由回復行動」を念頭に、尺度の4因子モデルを検討した。また、Merz 尺度を用いたいくつかの研究では尺度の因子構造が不安定であったため(小口他, 1999)、Hong (1989)は独自に Hong Psychological Reactance Scale (以下「Hong 尺度」)を作成した。

3 リアクタンス特性尺度の有効性の検討

上述のリアクタンス尺度の妥当性を検討する研究もなされている。例えば、今城(2003)は、Hong 尺度により測定されたリアクタンス特性とリアクタンス効果に影響を及ぼすことが明らかとなっている5つのパーソナリティ変数との関係、およびリアクタンス特性と説得効果の関係から尺度の妥当性を検討している。しかし、リアクタンスが喚起されても説得に対する抵抗(説得効果の低減)が必ず生じるというわけではない。脅威がそれほど大きくない場合にはリアクタンスが生じて、それが直接的な自由の行使である説得への抵抗を生じさせるほどの強いリアクタンス反応を喚起させない場合がある。また、説得に抵抗することで生じるコストに対する考慮など様々な抑制要因が作用して自由回復行動がとられないこともある。そこで、リアクタンス研究では、自由の行使以外の測度をリアクタンス喚起の指標とする場合がある。例えば今城(1986)は、自由の行使がなされない場合でも別の測度でリアクタンス反応が検出される可能性もあるとし、自由の行使以外にリア

クタンズ喚起における主観的な反応も検討する必要があるとしている。また、今城（1986）は、脅威の否認、説得効果の評価、活発度などがリアクタンズ喚起の測度として有効であるかどうかを検討し、脅威の否認や説得効果の過小評価などの有効性を確認した。このようにリアクタンズ研究、または実際の説得場面ではリアクタンズが喚起されたからといって、必ずしも自由の行使（説得への抵抗）が生じるわけではないので、自由の行使以外の複数の測度によってリアクタンズ喚起を検討する必要がある。したがって個人のリアクタンズの生じやすさを測定するリアクタンズ特性尺度も、自由の行使以外の複数の反応との関連性を備えていなくてはならない。

4 本研究の目的

本研究では、Hong 尺度（14 項目）、Merz 尺度（18 項目）、今城修正版 Merz 尺度（18+10 項目）、Hong 尺度 14 項目と今城修正版 Merz 尺度 18 項目を合わせた尺度（以下「総合尺度」）と、9 種類のリアクタンズ反応（意見変化（説得への抵抗）、話題の重要性変化、脅威認知、送り手への攻撃、リアクタンズの感情的反応、自由への魅力、送り手への好意、自己支配感情、メッセージ評価）との関連性をそれぞれ検討することにより、各尺度のリアクタンズ特性尺度としての有効性を評価する。

特性尺度としての有効性の高い尺度は、リアクタンズ喚起時に生じる複数の反応との間にリアクタンズ理論の予測する方向で関連性を示すはずである。つまり、リアクタンズ理論では脅威の大きい場合の方が脅威の小さい場合よりも強いリアクタンズ反応を喚起すると予測する。有効性の高い尺度で測定されたリアクタンズ特性の低い者（特性低群）とリアクタンズ特性の高い者（特性高群）のリアクタンズ反応は、脅威が小さい場合には差はみられないが、脅威が大きい場合には特性高群のリアクタンズ反応が特性低群のものよりも有意に大きくなるはずである。なお、尺度全体および、因子分析の結果得られた尺度を構成する各因子ごとに 9 種類のリアクタンズ反応との関連性を検討することによって、各尺度の有効性を評価することが可能となる。

方 法

1 実験計画と被験者

2 水準の脅威要因（脅威大条件と脅威小条件）による 1 要因 2 水準の被験者間計画を採用した。大学生 223 名を対象に、印刷された実験材料（質問紙と説得文がセットになった印刷物）を配付し、学生のアルバイトに反対する説得文が反態的脅威になるよう統一するため、「学生のアルバイトに反対」である立場の者（「初期意見」が 1～7 点の 7 段階尺度で 3 点以下の者）、また、提示される説得文が脅威にならないと考えられるアルバイト未経験者、学費・生活費をアルバイトの目的とする者は除外し、150 名（脅威小条件：74 名、脅威大条件：76 名）を分析の対象とした。

2 手続き

実験は、講義時間を利用して、印刷物を被験者に一斉配付することによって、集団実施した。印刷物の内容は、①事前測定質問、②リアクタンズ特性尺度、③説得文、④リアクタンズ喚起に関する諸反応の測定で構成されていた。なお説得文は「脅威小」と「脅威大」の 2 種類があり、各条件の被験者が同数になるようにランダムに配布した。

(1)事前測定

被験者が本研究の実験対象者として適切であるかどうかを判断するために、①アルバイト経験、②アルバイトの目的、③学期中の長期アルバイトの有無、④学期中のアルバイトが学業に支障をきたしたか否かについてそれぞれ質問した。

また、以下の4種類の項目についてそれぞれ7段階評定（「全く当てはまらない（1点）」～「非常によく当てはまる（7点）」）で回答させた。⑤「大学生がアルバイトをすること」についての意見（1項目）：「大学生がアルバイトをすることに賛成である」、⑥自由の確信度（1項目）：「アルバイトをすることかどうかを決める自由は自分にある」、⑦話題の重要性（1項目）：「大学生のアルバイトの是非という問題は自分にとって重要だ」、⑧自己決定欲求（1項目）：「大学生のアルバイトの是非という問題については自分自身で決定したい」。

(2)事後測定

説得文を読み、どのようなリアクティクス反応がどの程度喚起したかを判断するため、以下9種類（計26項目）の反応をそれぞれ7段階評定（「全く当てはまらない（1点）」～「非常によく当てはまる（7点）」）で評定させた。①脅威認知（4項目）：「著者は自分の行動の自由を制限しようとしている」、「著者に対し押しつけがましさを感じる」、「説得文を読み、自分の自由が制限されたように感じた」、「著者には他人の意見を尊重する姿勢がかけられている」、②意見変化（1項目）：「大学生がアルバイトすることに賛成である」、③重要性の変化（1項目）：「大学生のアルバイトの是非という問題は自分にとって重要だ」、④送り手への攻撃（2項目）：「著者に対し抗議したい」、「著者の意見を撤回したい」、⑤リアクティクスの感情的反応（4項目）：「説得文を読み反発を感じた」、「説得文を読み不愉快な気分になった」、「説得文を読み感じが悪いと思った」、「説得文を読み謙虚でなかった」、⑥送り手への好意（3項目）：「著者に対し好感を持てる」、「著者に対し親しみを感じる」、「著者に対し敵意を感じる：逆転項目」、⑦自由への魅力（3項目）：「アルバイトをすることに魅力を感じる」、「アルバイトをすることは良いことだ」、「アルバイトをすることは自分にとって意味のあることだ」、⑧自己支配感情（4項目）：「アルバイトをするかしないかについては他人に干渉されたくない」、「アルバイトをするかしないかについて指図されたくない」、「アルバイトをするかしないかについての決定権は自分にある」、「アルバイトをするかしないかについては自分の思うとおりにしたい」、⑨メッセージ評価（4項目）：「この説得文は信頼できる」、「この説得文は適切である」、「この説得文は説得力がある」、「この説得文は正確である」。

(3)従属変数

事前得点を分析に使用する変数は、①意見（初期意見）、②自由の確信度、③話題の重要性、④自己決定欲求の4変数であった。また、事後得点を分析に使用する変数は、①脅威認知、②送り手への攻撃、③リアクティクスの感情的反応、④送り手への好意、⑤自由への魅力、⑥自己支配感情、⑦メッセージ評価の7変数であった。さらに、変化得点（事後得点－事前得点）を分析に使用する変数は、①意見（意見変化）と②話題の重要性（重要性変化）の2変数であった。

(4)説得的コミュニケーション

大学生にとってアルバイトは重要な事項であり、アルバイトを禁止する内容の説得は受け手にリアクティクスを喚起させやすいと考え、説得メッセージとして、今城（1987）が使用した「大学生の

アルバイト」に反対の立場を主張する説得文を一部表記を変更して用いた。主な内容は「多くの場合学期中の長期アルバイトは学業に支障をきたす」ので「アルバイトを少し減らしてみてもどうか」というものであった。脅威の大きさを操作するために、脅威大条件では押しつけがましい表現、高圧的な表現を15個加えた。なお、説得文が分析対象者に対し反態度的脅威になるよう、被験者のうち「大学生のアルバイト」に関する初期意見が反対であった者（1～7点の7段階尺度で3点以下の者）は分析の対象から除外した。また、説得文の内容上、アルバイト未経験者や学費・生活費をアルバイトの目的とする者にとっては説得文が脅威にならないと考え、分析対象から除外した。

(5)リアクタンス特性

個人のリアクタンス特性を測定するため、Hong 尺度（14項目）、Merz 尺度（18項目）、今城（1993）が Merz 尺度に追加した項目（10項目）の計42項目についてそれぞれ5段階評定（「全く当てはまらない（1点）」～「非常によく当てはまる（5点）」）で回答を求めた。なお、Hong 尺度は小口ら（1999）が邦訳したもの、Merz 尺度は今城（1993）が邦訳したものを使用した。

結 果

1 リアクタンス特性尺度の因子分析

測定した結果から今回用いる4つの尺度（Hong 尺度、Merz 尺度、今城修正版 Merz 尺度、総合尺度）についてそれぞれ主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った（補助資料1～4参照）。

(1)Hong 尺度

今城（2002）にならって3因子解を指定し、因子負荷量.40未満の項目や、他の因子との負荷量の差が.10未満の項目は削除した。そして、その上で、再度同様の因子分析を行った結果、補助資料1に示す全12項目からなる3因子が抽出された。第1因子（6,9,3,8,11,10）は「他者からの影響に対する反発」に関する項目で構成されており、「干渉への反発」因子（ $\alpha=.81$ ）と命名した。第2因子（5,14,12,7）は「規則や他人を手本にすることに反発」することに関する項目で構成されており、「同調への反発」因子（ $\alpha=.76$ ）と命名した。第3因子（4,1）は「自分自身の自由にできないことへの不満」に関する項目で構成されており、「自由侵害への反発」因子（ $\alpha=.59$ ）と命名した。これらの因子は小口他（1999）が Hong 尺度を因子分析した際に分類した「働きかけへの反発因子」、「反同調因子」、「選択の自由因子」とそれぞれほぼ対応している。

(2)Merz 尺度

今城（1991）にならって3因子解を指定し、因子負荷量.40未満の項目や、他の因子との負荷量の差が.10未満の項目は削除した。そして、その上で、再度同様の因子分析を行った結果、補助資料2に示す全12項目からなる3因子が抽出された。第1因子（5,2,11,4,17）は他者からの影響に対し内的な反発を示す項目で構成されており、「感情的反発」因子（ $\alpha=.75$ ）と命名した。第2因子（9,10,7,6,3）は自分の自由への干渉に対する感情的反発や抵抗に関する項目で構成されており、「自由侵害への反発」因子（ $\alpha=.76$ ）と命名した。第3因子（14,16）は禁止や他者からの影響に対する反発に関する項目で構成されており、「干渉への反発」因子（ $\alpha=.73$ ）と命名した。

(3)今城修正版 Merz 尺度

今城 (1993) にならって 4 因子解を指定し、因子負荷量.40 未満の項目、他の因子との負荷量の差が.10 未満の項目は削除した。その上で再度同様の因子分析を行った結果、補助資料 3 に示す全 22 項目からなる 4 因子が抽出された。第 1 因子 (今 4,M3,今 6,M10,今 9,今 3,M7,M15) は自分の自由への干渉に対する感情的反発や抵抗に関する項目で構成されており、「意志決定の自由」因子 ($\alpha=.80$) と命名した。第 2 因子 (今 1,今 2,M14, M13,M16) は他者からの自由制約に対する自由回復を目指した行動に関する項目で構成されており、「直接的な自由回復の行使」因子 ($\alpha=.83$) と命名した。第 3 因子 (M17,M2,M11,M4,M12,M5) は他者からの影響に対し、内的な反発を示す項目で構成されており、「感情的反発」因子と ($\alpha=.75$) 命名した。第 4 因子 (今 7,今 8,今 10) は他者の干渉や規則に対する認知に関する項目で構成されており、「脅威の感受性」因子 ($\alpha=.69$) と命名した。

(4)総合尺度

多数の項目が今城修正版 Merz 尺度と共通していることから今城修正版 Merz 尺度と同様に 4 因子解を指定し、因子負荷量.40 未満の項目や、他の因子との負荷量の差が.10 未満の項目は削除した。そして、その上で再度同様の因子分析を行った結果、補助資料 4 に示す全 23 項目からなる 4 因子が抽出された。第 1 因子 (M14,今 2,今 1,M16,M13,H11) は他者からの自由制約に対する自由回復を目指した行動に関する項目で構成されており、「直接的な自由回復の行使」因子 ($\alpha=.86$) と命名した。第 2 因子 (M3,H7,今 4,M10,H4,今 9,今 6,今 3) は自分の自由への干渉に対する感情的反発や抵抗に関する項目で構成されており、「意志決定の自由」因子 ($\alpha=.81$) と命名した。第 3 因子 (M17,M11,M12,M4,M2,H10) は他者からの影響に対し、内的な反発を示す項目で構成されており、「感情的反発」因子と ($\alpha=.72$) 命名した。第 4 因子 (今 7,今 8,今 10) は他者の干渉や規則に対する認知に関する項目で構成されており、「脅威の感受性」因子 ($\alpha=.69$) と命名した。また、各尺度の各因子を構成する項目間の平均相関係数をまとめたものが表 1 である。

表1 各因子の平均相関係数

	Hong尺度	Merz尺度	今城尺度	総合尺度
第1因子	.42	.43	.33	.48
第2因子	.44	.39	.49	.35
第3因子	.41	.57	.25	.30
第4因子	-	-	.43	.43

2 初期意見、話題重要性、自由の確信度、自己決定欲求の平均と標準偏差

リアクタンス喚起の必要条件が満たされているかどうかを確認するために初期意見、話題重要性、自由の確信度、自己決定欲求の平均値と標準偏差を表 2 にまとめた。(すべて 1~7 の 7 段階評価)。初期意見の平均は 6.24 (3 以下の者は除外) であり、被験者は「大学生のアルバイトにかなり賛成」であるといえる。また、自由の確信度の平均は 6.37、自己決定欲求の平均は 5.61 であり「アルバイトについての決定権は自分にあるとかなり確信」し、「この問題に関してはどちらかと言えば自分で決定したい」という考えであった。しかし、話題の重要性の平均は 3.48 と低く「どちらとも言えない」という結果であった。

表2 初期意見, 話題重要性, 自由の確信度, 自己決定欲求の平均値と標準偏差

測度	平均	標準偏差
初期意見	6.24	0.81
話題重要性	3.48	1.52
自由の確信度	6.37	0.76
自己決定欲求	5.61	1.25

3 従属変数に関する脅威条件間の差

実験操作の有効性と、リアクタンス喚起の諸反応に関する脅威条件間の差を検討するために、各従属変数の平均値と標準偏差、および t 検定による脅威大条件と脅威小条件の差の検定結果を表3にまとめた。なお、複数の項目からなるものは項目平均を用いた。

脅威認知について条件間で有意差はあったものの ($t=-4.52, df=147.64, p<.001$)、脅威大条件でも1~7点の得点範囲で平均3.48と決して高くはない。その他のリアクタンス喚起の従属変数については、リアクタンス感情反応、送り手への攻撃において条件間で有意な差がみられた (それぞれ $t=-3.23, df=138.40, p<.01$; $t=-2.17, df=146.62, p<.05$)。

表3 従属変数の平均値と標準偏差および t 検定の結果

測度	脅威小条件($n=74$)	脅威大条件($n=76$)	t 値
脅威の認知 ($\alpha=.89$)	2.60(1.10)	3.48(1.19)	-4.52***
リア感情反応 ($\alpha=.62$)	2.85(1.32)	3.38(1.78)	-3.23**
送り手への好意 ($\alpha=.35$)	3.79(0.80)	3.65(0.73)	1.11
メッセージ評価 ($\alpha=.39$)	4.42(1.01)	4.26(2.04)	0.62
自由への魅力 ($\alpha=.80$)	5.24(0.93)	5.47(0.86)	-1.61
自己支配感情 ($\alpha=.68$)	5.42(0.82)	5.46(0.82)	-0.36
送り手への攻撃 ($\alpha=.82$)	3.03(1.35)	3.51(1.30)	-2.17*
意見変化量	-0.53(0.69)	-0.38(0.93)	-1.08
重要性変化量	0.50(1.43)	0.72(1.33)	-0.99

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

4 尺度 (および尺度を構成する因子) とリアクタンス反応との関連

各尺度について、尺度全体の得点および、因子得点のそれぞれ上位 25%・下位 25%をリアクタンス特性高群・低群として、それぞれ同数になるよう分類した。そして、リアクタンス喚起時の諸反応と各尺度とその因子との関連を検討するために、今回測定した 9 個の従属変数について脅威 (大・小) ×リアクタンス特性 (高・低) の 2 要因分散分析を行った。その結果、要因の効果が有意 (あるいは有意傾向 $.05<p<.10$) であった箇所をまとめて表4に示した。表4では脅威の主効果が存在する場合は脅威小条件と脅威大条件との間の比較を、特性の主効果が存在する場合は特性低群と特性高群との比較をそれぞれ不等号で表し、交互作用が存在する場合は「*」で表現し、表の下にその交互作用の形態を示した。なお、主効果、交互作用ともに括弧で括ってあるものは有意傾向




であることを表す。また、リアクタンス理論の仮定（脅威小条件より脅威大条件で、特性低群より特性高群でリアクタンス反応が大きい）と逆方向の結果は網掛け（）で示した。

表4 分散分析の主な結果

	Hong尺度			H第1因子			H第2因子			H第3因子		
	脅威	尺度	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互
意見変化												
重要性変化												
脅威認知	小<大			小<大			(*1) 小<大			小<大	低<高	
攻撃							 *2					
リアクタンス感情	小<大			小<大			小<大			小<大		
自由の魅力												
送り手への好意												
自己支配感情									*4			
メッセージ評価												

	Merz尺度			M第1因子			M第2因子			M第3因子		
	脅威	尺度	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互
意見変化	小<大											
重要性変化												
脅威認知	小<大			小<大			小<大			小<大	低<高	
攻撃							小<大					
リアクタンス感情	小<大			小<大			小<大			小<大		
自由の魅力												
送り手への好意												
自己支配感情		低<高						低<高				
メッセージ評価												

	今城尺度			今第1因子			今第2因子			今第3因子			今第4因子		
	脅威	尺度	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互
意見変化										小<大					
重要性変化															
脅威認知	小<大			小<大			小<大	低<高		小<大			小<大	低<高	
攻撃	小<大									 *3					
リアクタンス感情	小<大			小<大			小<大			小<大			小<大	低<高	
自由の魅力															
送り手への好意															
自己支配感情						低<高									
メッセージ評価								小<大							

	総合尺度			総第1因子			総第2因子			総第3因子			総第4因子		
	脅威	尺度	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互	脅威	因子	交互
意見変化	小<大									小<大					
重要性変化									低<高						
脅威認知	小<大			小<大	低<高		小<大	低<高		小<大			小<大	低<高	
攻撃							小<大								
リアクタンス感情	小<大			小<大			小<大			小<大			小<大	低<高	
自由の魅力															
送り手への好意															
自己支配感情		低<高							低<高						
メッセージ評価															

*1 脅威小:低<高 低群:小<大 脅威大:低≒高 高群:小≒大 *2 脅威小:低≒高 低群:小>大 脅威大:低≒高 高群:小≒大 *3 脅威小:低≒高 低群:小≒大 脅威大:低≒高 高群:小<大 *4 脅威小:低<高 低群:小<大 脅威大:低≒高 高群:小≒大

*5 脅威小:低≒高 低群:小>大 脅威大:低≒高 高群:小≒大 *6 脅威小:低≒高 低群:小≒大 脅威大:低<高 高群:小≒大 *7 脅威小:低≒高 低群:小≒大 脅威大:低<高 高群:小<大

(1) Hong 尺度

- ①尺度全体 尺度全体としては脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 20.68, p < .001$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果がみられた ($F(1,72) = 7.31, p < .05$)。
- ②第1因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 10.21, p < .05$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.90, p < .05$) がそれぞれみられた。また, 脅威認知で有意傾向の交互作用 ($F(1,72) = 3.50, p < .10$), 攻撃で有意傾向の交互作用 ($F(1,72) = 3.45, p < .10$) がそれぞれみられた。脅威認知に関して脅威小条件における特性の有意な単純主効果 ($F(1,72) = 4.61, p < .05$), 攻撃に関して特性低群における脅威の有意な単純主効果 ($F(1,71) = 3.97, p < .05$) がみられた。
- ③第2因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 19.43, p < .001$), リアクタンスの感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 6.93, p < .05$), 自己支配感情で有意な交互作用 ($F(1,72) = 4.63, p < .05$) がそれぞれみられた。また, 意見変化で有意傾向の交互作用 ($F(1,72) = 3.45, p < .10$) がみられた。意見変化に関して特性高群における脅威の単純主効果 ($F(1,72) = 4.33, p < .05$), 自己支配感情に関して特性高群における脅威の単純主効果 ($F(1,72) = 6.23, p < .05$) が有意であった。
- ④第3因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 15.10, p < .001$) と因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 7.04, p < .05$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.01, p < .05$) がみられた。

(2) Merz 尺度

- ①尺度全体 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 10.48, p < .05$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.76, p < .05$) がみられた。また, 意見変化で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 3.51, p < .10$), 自己支配感情で尺度の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 2.88, p < .10$) がみられた。
- ②第1因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 6.55, p < .05$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 5.10, p < .05$) がそれぞれみられた。
- ③第2因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 17.25, p < .001$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 10.70, p < .05$), 自己支配感情で因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 15.03, p < .001$) がみられた。また, 攻撃で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 3.12, p < .10$) がみられた。
- ④第3因子 脅威認知で脅威の主効果 ($F(1,72) = 7.93, p < .01$) がみられた。また脅威認知で因子の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 2.91, p < .10$), リアクタンス感情反応で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 3.89, p < .10$) がそれぞれみられた。

(3) 今城修正版 Merz 尺度

- ①尺度全体 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 17.54, p < .001$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 8.12, p < .01$) がみられた。また, 攻撃で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,71) = 3.63, p < .10$) がみられた。
- ②第1因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 8.32, p < .01$), リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 5.16, p < .05$), 自己支配感情で因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.59$,

$p<.05$) がそれぞれみられた。

③第2因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 14.97, p<.001$) と因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.92, p<.05$)、リアクタンス感情反応で因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 7.04, p<.01$) がそれぞれみられた。また、メッセージ評価で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 3.44, p<.10$) がそれぞれみられた。

④第3因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 5.55, p<.05$)、リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 5.96, p<.05$) がそれぞれみられた。また、意見変化で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 2.90, p<.10$)、攻撃で有意傾向の交互作用 ($F(1,72) = 2.97, p<.10$) がそれぞれみられた。攻撃に関して特性低群における脅威の単純主効果 ($F(1,72) = 5.35, p<.05$) が有意であった。

⑤第4因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 20.63, p<.001$) と因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 10.40, p<.01$)、リアクタンス感情反応で因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.01, p<.05$) がそれぞれみられた。また、意見変化で有意傾向の交互作用 ($F(1,72) = 3.11, p<.10$)、重要性変化で有意傾向の交互作用 ($F(1,72) = 3.74, p<.10$)、リアクタンス感情反応で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 3.73, p<.10$) がそれぞれみられた。意見変化に関して脅威大条件における因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.40, p<.05$)、重要性変化に関して特性高群における脅威の有意傾向の単純主効果 ($F(1,72) = 3.10, p<.10$) がそれぞれみられた。

(4)総合尺度

①尺度全体 意見変化で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 5.25, p<.05$)、脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 13.40, p<.001$)、リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 8.14, p<.01$) がそれぞれみられた。また、自己支配感情で尺度の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 3.23, p<.10$) がみられた。

②第1因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 12.01, p<.01$) と因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 6.29, p<.01$)、リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 6.71, p<.05$) がそれぞれみられた。

③第2因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 17.68, p<.001$) と因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 5.04, p<.05$)、リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 7.78, p<.01$)、自己支配感情で因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.00, p<.05$) がそれぞれみられた。また、重要性変化で因子の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 2.91, p<.10$)、攻撃で脅威の有意傾向の主効果 ($F(1,72) = 3.64, p<.10$) がそれぞれみられた。

④第3因子 意見変化で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 6.10, p<.05$)、脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 8.10, p<.01$)、リアクタンス感情反応で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 6.60, p<.05$) がそれぞれみられた。

⑤第4因子 脅威認知で脅威の有意な主効果 ($F(1,72) = 20.63, p<.001$) と因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 10.40, p<.01$)、リアクタンス感情反応で因子の有意な主効果 ($F(1,72) = 4.01, p<.05$)、脅威の主効果の有意傾向 ($F(1,72) = 3.73, p<.10$) がそれぞれみられた。また、意見変化で有意傾向

向の交互作用 ($F(1,72) = 3.11, p < .10$), 重要性変化で有意傾向の交互作用 ($F(1,72) = 3.74, p < .10$) がそれぞれみられた。意見変化に関して脅威大条件における因子の有意な単純主効果 ($F(1,72) = 4.40, p < .05$), 重要性変化に関して特性高群における脅威の有意傾向の単純主効果 ($F(1,72) = 3.10, p < .10$) がそれぞれみられた。

考 察

1 リアクタンス喚起に関わる条件

(1) リアクタンス喚起の必要条件

自由の重要性は平均 3.48 であり、決して高いとは言えないが、自由の確信度 ($M = 6.37$) と自己決定欲求 ($M = 5.61$) は高く、ある程度はリアクタンスが喚起される条件は揃っていたと言える。

(2) 脅威操作の有効性の検討

本実験で行った脅威操作が有効であったかどうかを検討するために、説得的コミュニケーションを読んだ脅威小条件と脅威大条件の間で、脅威認知の比較を行った。脅威認知は脅威小条件 ($M = 2.60$) よりも脅威大条件 ($M = 3.48$) の方で有意に大きくなっており、自由への脅威操作は有効であったと考えられる。

(3) リアクタンス喚起の諸反応

リアクタンスの感情的反応は、脅威大条件で有意に増大した。また、送り手への攻撃も脅威大条件で有意に増大した。その一方で、その他の従属変数については、脅威小条件と脅威大条件の間に有意差は認められなかった。これらの結果は、①話題重要性が低かったこと、②脅威条件間では脅威認知に有意差がみられたものの、引き起こされた脅威認知の水準が低かったことが原因であったと考えられる。

2 各リアクタンス特性尺度の有効性

Hong 尺度, Merz 尺度, 今城修正版 Merz 尺度, 総合尺度のリアクタンス特性尺度としての有効性を、信頼性と妥当性の 2 側面から評価する。すなわち、尺度の信頼性として「因子ごとの内的整合性」と「因子の解釈のしやすさ」の観点から、また尺度の妥当性は「尺度 (因子) 特性の有意な (あるいは有意傾向の) 主効果の出現率と、脅威と尺度 (因子) 特性の有意な (あるいは有意傾向の) 交互作用の出現率」の観点から各尺度を評価し、尺度としての総合的な有効性を判断する。

(1) 内的整合性

各尺度について、因子の内的な整合性を評価するため、各因子を構成する項目間の平均相関係数を算出した (表 5)。比較したところ、どの尺度においても、各因子の平均相関係数は中程度のものであり、内的整合性という観点からは尺度間に差はみられなかった。

(2) 6 因子の解釈のしやすさ

同じ傾向のもの、同じような内容の項目によって因子が構成されているか、明らかに内容の異なる項目が多数混入していないかといった観点から、各尺度の因子の解釈のしやすさを評価した。全ての尺度において、各因子がほぼ同じ内容、概念に関する項目によって構成されており、因子の解釈は容易であった。したがって因子の解釈のしやすさという観点からは尺度による差はみられな

った。

(3)特性（尺度全体と因子）の主効果と、脅威と特性（尺度全体と因子）の交互作用の出現率

尺度の妥当性を評価するために、各尺度において特性（尺度全体および因子）の主効果と、脅威と特性（尺度全体および因子）の交互作用の個数を集計した（表5）。そして、仮説と一致する結果の個数（表6）から仮説と逆方向の結果の個数（表7）を差し引いたものを、正味の有効性とみなし、集計した（表8）。

Hong 尺度では、尺度全体、第1因子、第2因子、第3因子が9つの従属変数に及ぼす効果に関して、特性の主効果は1つ、脅威と特性の交互作用は4つ（うち有意傾向2つ）みられた（5/72）。しかし、攻撃に関する第1因子の特性と脅威の交互作用は仮説と逆方向のものであった。したがって Hong 尺度の正味の有効性は4.2%（3/72）と判断できる。

Merz 尺度では、尺度全体、第1因子、第2因子、第3因子が9つの従属変数に及ぼす効果に関して、特性の主効果が3つ（うち有意傾向2つ）みられたが、脅威と特性の交互作用はみられなかった。したがって Merz 尺度の正味の有効性は4.2%（3/72）と判断できる。

今城修正版 Merz 尺度では、尺度全体、第1因子、第2因子、第3因子、第4因子が9つの従属変数に及ぼす効果に関して、特性の主効果が4つみられ、脅威と特性の交互作用が3つ（うち有意傾向3つ）みられた（7/90）。しかし、攻撃に関する第3因子の特性と脅威の交互作用が仮説と逆方向のものであった。したがって今城修正版 Merz 尺度の正味の有効性は5.6%（5/90）と判断できる。

総合尺度では、尺度全体、第1因子、第2因子、第3因子、第4因子が9つの従属変数に及ぼす効果に関して、特性の主効果は7つ（うち有意傾向2つ）、脅威と特性の交互作用が2つ（うち有意傾向2つ）みられた。したがって総合尺度の正味の有効性は10.0%（9/90）と判断できる。

以上の結果から、仮説と一致する方向での正味の出現率という視点から判断した場合、特性の主効果と交互作用の出現率が高い尺度は、①総合尺度、②今城修正版 Merz 尺度、③Hong 尺度と Merz 尺度の順であった。

表5 主効果と交互作用の個数

	Hong尺度	Merz尺度	今城尺度	総合尺度
主効果	1+(0)	1+(2)	4+(0)	5+(2)
交互作用	2+(2)	0+(0)	0+(3)	0+(2)
合計	3+(3)	1+(2)	4+(3)	5+(4)

括弧内の数字は有意傾向の数

表6 仮説と一致する主効果と交互作用の個数

	Hong尺度	Merz尺度	今城尺度	総合尺度
主効果	1+(0)	1+(2)	4+(0)	5+(2)
交互作用	1+(2)	0+(0)	0+(2)	0+(2)

括弧内の数字は有意傾向の数

表7 仮説と逆方向の主効果と交互作用の個数

	Hong尺度	Merz尺度	今城尺度	総合尺度
主効果				
交互作用	1		(1)	

括弧内の数字は有意傾向の数

表8 正味の有効性

	Hong尺度	Merz尺度	今城尺度	総合尺度
主効果	1+(0)	1+(2)	4+(0)	5+(2)
交互作用	0+(2)	0+(0)	0+(1)	0+(2)
合計	1+(2)	1+(2)	4+(1)	5+(4)

括弧内の数字は有意傾向の数

(4)各尺度の有効性に関する総合的な評価

以上の3つの観点からの各尺度の相対的な有効性をまとめたものが表9である。

内的整合性, 因子の解釈のしやすさという点では, どの尺度にも差はほとんどみられなかったが, 総合尺度においては, 特性の主効果や特性と脅威の交互作用が検出された割合は他の尺度よりも高い。したがって, 今回用いた4つの尺度の中では総合尺度が最もリアクタンス特性尺度としての有効性が高いと言える。また, 尺度はできるだけ少ない項目数で構成されていることが望ましいと考えられる。しかし, 総合尺度は23項目で構成されており, 今城修正版 Merz 尺度 (22項目) と比べた場合1項目しか変わらない (補助資料3と4参照)。よって総合尺度は項目数に関しても問題はないと考えられる。むしろ, 全体的な項目数にして1項目しか差がないにもかかわらず, 従属変数との関連性が見られた割合に2倍近い差がみられたことにより, 総合尺度の尺度としての有効性の高さが示唆される。

表9 尺度の有効性の検討

	Hong尺度	Merz尺度	今城尺度	総合尺度
内的整合性	△	△	△	△
因子の解釈の容易さ	○	○	○	○
効果の出現率	×	×	△	○

括弧内の数字は有意傾向の数

3 本研究のまとめと今後の課題

今回の実験では, 脅威大条件と脅威小条件の間で有意差がみられたのは9つの従属変数のうち脅威認知, リアクタンス感情反応, 攻撃の3つのみであった。また, 脅威大条件においてもほとんどの従属変数の平均が7段階評定 (1点~7点) 中4.0以下と低かった。このように, 本実験で用いた脅威操作では強いリアクタンスは喚起されておらず, 条件間で従属変数の差もほとんどみられなかった。ただし, 総合尺度においてリアクタンス喚起の従属変数との有効な関連性がみられた割合は10.0% (9/90) であり, 比較的高いものであったと言える。また, 実験操作で条件間に有

意差がみられた3つの従属変数の他に、条件間に有意差がみられなかった自己支配欲求、重要性変化、意見変化とも特性の関連性がみられたことは、特性尺度としての有効性が高いことを窺わせる。特に、リアクタンス喚起の直接的な表出と考えられる意見変化（説得への抵抗）において、脅威の小さい場合にはリアクタンス特性による差はみられず、脅威の大きい場合に特性による差が大きくなるという交互作用がみられたことは注目に値する。本実験での脅威は強いリアクタンスを喚起させるほど大きいものでなかったため、リアクタンス特性（尺度全体および因子）と従属変数との関連性はそれほどみられなかったが、もしより大きな条件差を生じさせ、より強いリアクタンス反応がみられるように実験操作を改善するならば、リアクタンス特性とリアクタンス反応との関連性は本実験で得られたものよりもさらに顕著にみられると考えられる。

要 約

心理的リアクタンス理論は、個人の自由に対する脅威がその個人のリアクタンスを喚起すると仮定する。このリアクタンス喚起度（状態リアクタンスの強度）は、個人のパーソナリティであるリアクタンス特性によって規定される。本研究の目的は、リアクタンス特性の最適な測定尺度を特定することであった。

本研究は反態度的説得の脅威を扱った。被験者は、本実験に適切な大学生150名であり、彼らは脅威大条件と脅威小条件に無作為に配置された。実験手続きは次のとおりであった：(1) 従属変数の事前測定、(2) リアクタンス特性の測定、(3) 脅威の操作と説得メッセージの提示、(4) 従属変数の事後測定。リアクタンス特性尺度として、Hongの心理的リアクタンス尺度（Hong尺度：14項目）、Merzの心理的リアクタンス測定質問紙（Merz尺度：18項目）、Merzの心理的リアクタンス測定質問紙の今城修正版尺度（Merz-今城尺度：28項目）の3種類の尺度を使用した。分析には、これらの3尺度のほか、3尺度の項目すべてを加算した総合心理的リアクタンス尺度（総合尺度：42項目）も使用した。

他の3尺度に比較して、総合尺度によって測定されたリアクタンス特性は、従属変数に及ぼすリアクタンス特性の主効果、および脅威とリアクタンス特性の交互作用効果を最も多く示した。このように、総合尺度は最も高い妥当性と信頼性を持つことが解明された。なお、総合尺度は、23項目（Hong尺度の4項目、Merz尺度の10項目、Merz-今城尺度の今城追加9項目）から成り、4因子構造であった。

引用文献

- Brehm, J.W. 1966 *A theory of psychological reactance*. New York : Academic Press.
- Brehm, S.S., & Brehm, J.W. 1981 *Psychological reactance : A theory of freedom and control*. New York : Academic Press.
- 深田博己 1996 心理的リアクタンス理論(1) 広島大学教育学部紀要 第1部(心理学), 45, 35-44.
- 今城周造 1986 リアクタンス喚起の測度の検討(1) 岩手県立盛岡短期大学研究報告, 37, 65-71.
- 今城周造 1987 自由制約的立場の唱導によるリアクタンス喚起 岩手県立盛岡短期大学研究報告,

38, 47-53.

今城周造 1993 心理的リアクタンス尺度の検討(2) 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 502.

今城周造 1994 圧力を伴わない行動制約的立場の唱導が禁止された行動の魅力に及ぼす効果 岩手県立盛岡短期大学研究報告, 45, 123-130.

今城周造 2001 説得におけるリアクタンス効果の研究 北大路書房

今城周造 2003 リアクタンス尺度とパーソナリティ・説得効果の関連 岩手県立盛岡短期大学研究報告, 53, 1-9.

小口孝史・岡田尚子 1999 リアクタンスの3次元 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 2, 14-31.

上野徳美 1986 自由への脅威と受け手の独自性がリアクタンス減少に及ぼす効果 心理学研究, 57, 228-234.

補助資料1 Hong尺度の因子分析結果

		I	II	III	共通性
H6	他者からの激励に対し反感を覚える	.805	-.188	.042	.527
H9	他者からの働きかけに対して反抗する	.640	.265	-.126	.627
H3	他者からのアドバイスを押しつけがましいと思う	.609	-.064	.112	.368
H8	他者から何か言われると逆のことをしたくなる	.591	.123	.020	.451
H11	助言されたりしても大抵反対のことをする	.560	.351	-.047	.633
H10	明白なことを指摘されるとイライラする	.462	-.016	.139	.250
H5	社会の規則に従っている人を見るとガッカリする	.063	.560	-.073	.333
H14	規則や規制があると反発したくなる	.231	.488	.100	.467
H12	他人を手本にするよう言われると腹が立つ	.141	.467	-.024	.303
H7	自分の意志で振る舞えると満足する	-.383	.464	.185	.228
H4	自由に意志決定が出来ないと腹が立つ	-.059	.149	.883	.859
H1	物事を自由に選ばないと腹が立つ	.288	-.165	.679	.526
因子間相関		I	—	.550	.240
		II	—	—	.324

補助資料2 Merz尺度の因子分析結果

		I	II	III	共通性
M5	人から助言されると押しつけがましと思う	.700	-.150	.032	.404
M2	「これをやれ」「あれはするな」と指図されると反発を感じる	.646	.094	.072	.555
M11	「あの人を見習え」と言われると腹が立つ	.604	-.004	-.039	.341
M4	「これをやれ」と強制されると「やりたくない」と思う	.598	-.114	.226	.454
M17	自分でも分かっていることを人から注意されると腹が立つ	.568	-.022	-.085	.269
M9	自分がどう行動するかを人に決められるのは、嫌だ	.129	.816	-.173	.729
M10	私の自由な意志決定を押さえつけようとする人が居たら腹が立つ	.178	.714	-.125	.632
M7	自分がどう行動するかについて人から何も言われたくない	-.226	.610	.171	.314
M6	私に圧力をかけて言うことを聞かせようとする人が居たら、断固として抵抗する	.045	.498	.235	.418
M3	人に頼らず、自分で自由に意志決定することは私にとって非常に重要だ	-.185	.470	.167	.197
M14	何かを禁止されると返ってそれをやりたくなる	-.039	.059	.792	.629
M16	人から言われたことに反対したくなる	.214	.130	.548	.557
因子間相関		I	—	.608	.487
		II	—	—	3.18

補助資料3 今城修正版Merz尺度の因子分析結果

		I	II	III	IV	共通性
今4	自分がどう行動したらよいかは、自分で判断できる	.645	-.151	-.091	-.091	.312
M3	人に頼らず、自分で自由に意志決定することは私にとって非常に重要だ	.622	.032	-.179	.040	.342
今6	私が決めるべき事に口出しされたら、干渉をやめるようにその人に抗議する	.603	.259	-.118	.062	.524
M10	私の自由な意志決定を押さえつけようとする人が居たら腹が立つ	.587	-.117	.378	-.142	.532
今9	私がどうするべきかを人から指図されると「それは私の決めることだ」と思う	.495	-.189	.314	.274	.571
今3	理不尽な規則には従わず、敢えて違反する	.487	.206	.077	-.136	.361
M7	私に圧力をかけて言うことを聞かせようとする人が居たら、断固として抵抗する	.459	.127	-.016	-.039	.255
M15	私がか心から納得できるのは、自分の自由意志でやったことだけだ	.434	.141	-.053	.138	.309
今1	人からやれと言われたことは敢えてやらない	.184	.825	-.084	-.102	.688
今2	人から『するな』と言われたことを敢えて実行する	.197	.789	-.140	.008	.686
M14	何かを禁止されると返ってそれをやりたくなる	-.039	.633	.028	.094	.469
M13	周囲の人が私に期待する行動は、それだけでもうやる気がなくなる	-.249	.582	.254	.039	.458
M16	人から言われたことに反対したくなる	.059	.457	.223	.138	.520
M17	自分でも分かっていることを人から注意されると腹が立つ	-.015	-.119	.628	-.028	.313
M2	「これをやれ」「あれはするな」と指図されると反発を感じる	.077	.137	.599	.023	.538
M11	「あの人を見習え」と言われると腹が立つ	.096	-.095	.581	-.002	.342
M4	「これをやれ」と強制されると「やりたくない」と思う	-.136	.341	.563	-.107	.465
M12	大袈裟に褒められると相手の意図を疑う	-.162	.104	.514	-.185	.211
M5	人から助言されると押しつけがましと思う	-.093	.056	.498	.277	.443
今7	人から指図されたと感じることが多い	-.189	.078	-.132	.893	.708
今8	周囲の人は私の行動にしばしば干渉する	.045	-.051	-.080	.649	.369
今10	規則が厳しすぎると感じる人が多い	.138	.047	.071	.511	.410
	I	—	.442	.461	.334	
因子間相関	II	—	—	.513	.519	
	III	—	—	—	.459	

補助資料4 総合尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	共通性
今1 人からやれと言われたことは敢えてやらない	.899	.131	-.104	-.141	.718
今2 人から『するな』と言われたことを敢えて実行する	.860	.170	-.176	-.025	.720
M14 何かを禁止されると返ってそれをやりたくなる	.612	-.055	.045	.102	.453
H11 助言されたりしても大抵反対のことをする	.552	-.088	.205	.129	.522
M13 周囲の人が私に期待する行動は、それだけでもうやる気がしなくなる	.535	-.204	.199	.093	.417
M16 人から言われたことに反対したくなる	.502	-.045	.265	.134	.550
今4 自分がどう行動したらよいかは、自分で判断できる	-.106	.677	-.133	-.070	.356
M3 人に頼らず、自分で自由に意志決定することは私にとって非常に重要だ	.086	.666	-.187	.014	.414
H7 自分の意志で振る舞えたと満足する	.131	.608	-.256	-.091	.334
M10 私の自由な意志決定を押さえつけようとする人が居たら腹が立つ	-.103	.601	.349	-.090	.543
H4 自由に意志決定が出来ないと腹が立つ	-.105	.512	.165	.123	.370
今9 私がどうするべきかを人から指図されると「それは私の決めることだ」と思う	-.131	.503	.245	.296	.553
今6 私が決めるべき事に口出しされたら、干渉をやめるようにその人に抗議する	.316	.458	-.059	.065	.432
今3 理不尽な規則には従わず、敢えて違反する	.216	.401	.173	-.134	.343
M17 自分でも分かっていることを人から注意されると腹が立つ	-.133	-.022	.659	-.013	.347
M11 「あの人を見習え」と言われると腹が立つ	-.027	.044	.574	-.014	.330
M12 大袈裟に褒められると相手の意図を疑う	.043	-.202	.572	-.138	.244
M4 「これをやれ」と強制されると「やりたくない」と思う	.320	-.095	.517	-.090	.421
M2 「これをやれ」「あれはするな」と指図されると反発を感じる	.149	.124	.512	.061	.495
H10 明白なことを指摘されるとイライラする	.082	-.071	.495	-.113	.219
今7 人から指図されたと感じることが多い	.096	-.165	-.189	.893	.707
今8 周囲の人は私の行動にしばしば干渉する	-.052	.014	-.080	.685	.399
今10 規則が厳しすぎると感じる人が多い	.121	.139	-.002	.477	.374
	I	—	.419	.514	.519
因子間相関	II	—	—	.433	.301
	III	—	—	—	.465